二〇二三（令和五）年度　長野大学　編入学試験

小論文

次の文章を読み、設問一および設問二に答えなさい。

コロナは、危機のしわ寄せがいくのはどういうところなのか、ということをあぶり出しました。それは、今まで私たちがどこに目をつぶっていたのかという問題と重なります。

たとえば、新型コロナウイルスに罹患（りかん）したひとり親が子どもだけを家に残して入院するリスクは、コロナ以前に親が病気になって生活が困難になるリスクと比べて、どちらが高いのか。

あるいは、野宿者たちにとって、病気に罹るリスクと新型コロナウイルスに罹るリスクのどちらが高いのか。

感染の危機にさらされながらも日々はたらきに出る看護師や介護士は、はたしてそれに見合う賃金を得ているのか。

また、コロナ禍で生じた二〇〇万人とも言われる失業者が派遣労働者に集中し、生活の危機にさらされているのは、派遣労働という、何かあったらすぐに首を切れる雇用形態がすでにつくり上げられていたからではないのか。

海外に目を向ければ、ブラック・ライヴズ・マターのデモの参加者のうち少なからぬ人たちは、実際にコロナ禍で大きなダメージを受けた人たちでもありました。リモートワークができない、低賃金労働についていたということはもとより、集団感染が起きた食肉工場ではたらく人々の多くもやはり黒人やヒスパニックの人々でした。密集してはたらく大規模食肉工場の環境自体がウイルスが蔓延しやすいもので、食肉工場の劣悪な労働環境については、エリック・シュローサーという有名なアメリカのジャーナリストが『ファストフード・ネイション』（邦題『ファストフードが世界を食いつくす』楡井浩一訳、草思社）という著書で伝えています。大量の食肉を捌（さば）くためには人が密に集まらざるを得ず、休憩もろくに取れない中で、次々と流れてくる肉を短時間でナイフを使って捌くのは、非常にきつい作業です。しかし、食肉工場での感染リスクの深刻さが報じられて以降も、トランプ大統領（当時）は一九五〇年の朝鮮戦争時の法律を適用する形で、食肉処理工場の業務を続けさせる大統領令を出しました。

感染リスクにさらされていたのは、アメリカの食肉工場の労働者だけではありません。たとえば、ドイツの食肉加工工場の労働者の多くが低賃金で雇われたルーマニアやブルガリアから来た労働者で、彼らは工場だけではなく日常生活でも狭い住居の中に押し込められ、やはり集団感染が発生することになりました。

私たちの中でどれだけ、自分たちが食べているパック詰めの肉がこのような過酷な労働によって加工されていることを知っていた人がいたでしょうか。コロナが蔓延していく中で次々と明るみに出てきた貧困、ＤＶ、児童虐待といった数々の問題は、ずっと前から私たちの周りにあったものばかりです。しかし、私たちはこれらのことを知ろうともしてきませんでした。あるいは、知っていても向き合おうとしてこなかったり、忘れようとしたりしたとも言えます。

コロナがあぶり出した社会のひずみを一言で言うとしたら、平和学の研究者ヨハン・ガルトゥングが掲げた「構造的暴力」ということになるでしょう。誰が加害者なのかがあいまいで、しかも加害者が危害を加えている意識が非常に薄く、その上「サステイナブル」であるため、被害者の側は日常的に苦しめられている、これが構造的暴力の特徴です。また、武器を使って敵を殺害する直接的暴力とは違い、メディアの報道に乗りにくく、人々が知る機会が少ないという点も挙げられます。ただ、本当に重要なのは、私たちが知ろうとしなかったことなのです。

コロナ禍で、私たちは「これは危機だ」「大変なことになっている」と不安にかられていますが、実はそう叫んでいる人々の多くは、このような危機をリアルに感じてきた人たちの存在に気づかなかったから、「新たな不安」として感じることができるのです。コロナ以前から、コロナ以上の危機を抱えて暮らしてきた人たちが大勢いたことに今こそ気づくべきだと思います。

（藤原辰史「コロナがあぶり出した社会のひずみ」（一部改変）福岡伸一・伊藤亜紗・藤原辰史『ポスト・コロナの生命哲学』所収）

二〇二三（令和五）年度　長野大学　編入学試験

小　論　文　解答用紙

受　験　番　号	
FF—	
TT—	
JJ—	
	氏　名

設問一　要旨を二〇〇字（二〇字×一〇行）以内で書きなさい。

10　5

（設問二は裏面にあります。）

設問二　著者の主張をふまえ、あなたの意見を四〇〇字（二〇字×二〇行）以内で書きなさい。